

HPVワクチンとアブステナンス教育

看護師・アブステナンス教育スタッフ 梶井 小百合

HPV（子宮頸がんの原因ウイルス）の予防ワクチンができました。この予防接種を受けるようにというキャンペーンがさかんに行われています。

TVニュースで流される情報には、子宮頸がんにかかった女優さんが予防接種を受けるように自分の体験を話したり、20代で子宮頸がんにかかり子宮を摘出した一般女性が、その他いろいろな治療を通して、「女性としてどれほどつらい思いをしたか、私のような思いは二度と皆さんにしてみらいたくない、そのため、子宮頸がんの予防接種を受けてください」と訴えるものが多く見られます。

このようなキャンペーンに参加した10代やその母親の意見も、「ガンになるのは怖いので、予防接種を受けたい」とか、「予防接種で防げるものなら、子どもにも受けさせたい」というものばかりです。

このような情報を聞くと、まるで、女性として生まれたことはHPVに感染すること、また子宮頸がんになることであり、これを避けることは難しいと言

わんばかりの内容になっていま

しかし、HPVは性行為で感染するもので、性行為によってHPVに感染した人だけに子宮頸がんが発病すること、それもHPVに感染したからといって100%子宮頸がんになるわけではないという事実は伝わっていないようです。

【子宮頸がんの実態】

ここ数年、子宮頸がん罹患する若い女性が増えていることは事実です。

国立がんセンターの統計資料によると、下図でも分かるように、10代半ばから子宮頸がんの患者が現れ始め、20代から30代での患者数がとても多くなっています。

また、左下のグラフは同じく、国立がんセンターのもので、子宮頸がんの死亡率を表しています。20代前半でも死亡者が出てくるのが分かりますし、結婚、出産年齢に達している20代後半、30代の死亡率が上がってきていることも見逃せません。

【HPVウイルスとは？】

HPVウイルスには100種類ほどのタイプがあり、そのうち40種類ほどが性器に感染する「性器HPV」と呼ばれるものです。この性器HPVは性行為で感染します。

40種類ほどの性器HPVのうち、ガンになるものを「高リスクHPV」と呼び、10〜15種類ほどあります。そのほかの性器HPVは「低リスクHPV」と呼び、コンジローマなどの良性乳頭腫に代表されるものがあります。

現在話題になっているワクチンは、10〜15種類ある高リスクHPVウイルスの中のおもに16型と18型の2種類に有効とされ

ているワクチン接種のことで、（他の数種類のウイルスにも対応できるワクチンを混ぜてもあるものもありますが、高リスクHPVの全種類に対応できるものはありません）

先にも説明したとおり、性器HPVは性行為で感染します。そして、そのHPV感染が原因で起こる子宮頸がんが10代にまで広まっている中、実際に彼らの性行動はどうなっているのかを見てみましょう。

次ページの図は家族計画協会の2008年「児童・生徒の性意識行動調査」結果の概要の中の高校3年生男女の性交経験率です。この図から分かるように、高校3年生の性交経験率は年々上がってきて、2008年には

高3生の半数近くは経験していることになりました。

現代の一般的な考え方は、「若者の間で性行為は一般的なものになっているので、今の若者は誰でもHPVに感染する機会があるし、だれでも子宮頸がんになる可能性がある」というものです。

これらの事実をもって、性交経験の少ない中学生、できれば、性体験のない中学入学前に、HPVワクチンの接種を行うことが効果的な予防だということ、現在は11歳、12歳での接種を呼びかけています。地域によっては、「中学入学前でどうワクチン」と称して、公費でワクチン接種を行っている

【接種されていく事実】

しかし、現行のHPVワクチンは約40種類ある性器HPVウイルスすべてに有効ではないということを知っておくべきです。高リスクHPVのうち、16型が全体の50〜60%で検出され、二番目に多いのは欧米では18型と言われていますが、日本では、18型より33型や58型が多いということです。52型も多いという情報もあります。

今行われているHPVワクチンは欧米で開発されたものなので、16型と18型に有効なもので

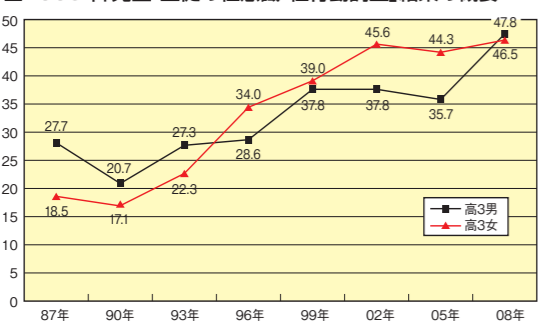
らの事実から、一つのことが見えてきます。

報道では「ほとんどの人に有効であろう」という事実を伝えられているだけに、いかにも「全ての人に有効である」、「正しい方法はこれしかない」という印象を与えている点です。

報道の内容に関しても、全ての情報を与えているように見えますが、先にも書いたとおり、このワクチンでの死者の情報は全くと言っていいくらいテレビの報道には登場し

ませんし、副作用についても印象に残るような報道はされず、「このワクチンを接種すれば、子宮頸がんにならなくてすむ」という印象を与えるもので、性行為を避けることが一番の予防策であるという伝えかた

■2008年「児童・生徒の性意識・性行動調査」結果の概要



学年	性	87年	90年	93年	96年	99年	02年	05年	08年
高3	男	27.7	20.7	27.3	28.6	37.8	37.3	35.7	47.3
	女	18.5	17.1	22.3	34.0	39.0	45.6	44.3	46.5
高2	男	24.2	17.4	24.0	25.6	33.5	33.2	23.5	27.9
	女	12.7	12.5	18.0	29.5	34.8	40.9	26.4	30.4
高1	男	18.5	13.7	15.1	17.3	25.0	24.8	12.3	24.5
	女	6.6	6.4	9.2	17.6	22.1	25.5	14.6	24.3
中3	男	12.0	10.5	8.8	6.5	15.3	12.3	4.3	5.5
	女	1.8	3.4	2.9	7.2	8.0	9.1	9.8	8.3
中2	男	7.7	5.6	4.4	4.0	9.5	6.9	1.4	1.4
	女	1.5	2.6	1.5	3.1	3.6	4.2	5.1	5.1
中1	男	4.9	3.7	1.8	2.4	5.2	5.2	0.4	0.4
	女	0.8	2.2	0.8	1.4	2.0	1.3	0.9	0.9

子宮頸がんは、性行動の選択によって、完全に防げます。しかし、いつのまにか「このワクチンにかかる費用はだれが持つのか」という問題にすり替わり、公費で行うことが最大の福祉だという論議に終始しています。

は一切していません。若者の性交経験者が多いので、「全ての若者が性行為をする」、「ほとんどの女性が一生の間に一度はHPVウイルスに感染する」という考えが出発点です。

ここでしっかり考えなくてはいけないのは、これだけ若者の間で性行為が一般的になった背景には、情報社会の影響、中でも、性行為を個人の権利として認めてきた教育、社会の性に対する認識の変化があるということです。

また、ワクチン接種を受けた少女が「自分は安全だ」と思い、安易な性行動に走ることも危惧されます。

最大の問題は、10歳から12歳くらいの少女に、子宮頸がんは性行為を避ける事によって確実に防げるという事実を教えず、インフルエンザや、はしかの予防接種と同じような感覚で、ワクチン接種を進めようとしていること、そして少女たちもアブステナンスを選ぶ権利があるのに、その情報や教育を与えずその権利を奪い、身体的な副作用や、数が少ないとはいえ「死」という結果を生むかも知れないワクチンを大人の判断で受けさせようとしている点です。

このように、HPVワクチン接種をとりまく状況は解決していかなくてはいけない状況が多くあります。

結婚に対する価値観が低くなっている現在、結婚するまで性行動を控えることの意味がほとんど忘れられています。ですから、性感染症や、安易な性行為から受ける心と体の傷から守られるだけではなく、魂も救われ守られるよう、一人一人の若者との出会いを大切に、これからも自信をもってアブステナンスを伝えたいと私は思っています。

日本でも比較的多いとされている52型、58型、33型に感染した場合は、ワクチン接種していても子宮頸がんになるという事が起こるのです。

「また、このワクチンは感染を防ぐものではなく、発症を防ぐ効果があるので、いったんHPV感染があると、その排除が難しいので、感染そのものを防ぐ必要がある」（国立感染症センターIASSR2008年9月号より）と伝えているものもあります。

その上、この予防接種は終生有効ではなく、感染予防効果を維持できるのは10年から20年とするものもあれば、「5年程度にすぎない」という情報もあり、仮に5年程度の予防効果しかないとする、10歳で予防接種を受けたとして、性行動が活発になる10代後半から20代では、その効果は期待できないということになります。

「HPVは性行為で感染する」